

# 交 流

## 体を巡る若干のことから

— 中国や日本を考える —

海上保安大学校

谷 峰 夫

看護学部の学生を対象とした中国語教育を続ける中で人間の身体についていろいろ考えさせられることがあり、その一端をここに表題の如き形でまとめることとします。今回取り上げたのは五項目ですが、今後は項目を増やすことも考えています。それでは以下五つの項目について順を追って述べてゆきます。

### ■ 腹に入る学問

古くは曝涼（ばくりょう）とも言った虫干しは中国では陰曆七月七日の行事であったが、この虫干しにまつわる面白い話が《世説新語》（南朝宋の劉義慶編）の中にあるので先ずそれから見ておこうと思う。その任誕（にんたん）篇には竹林の七賢の一人である阮咸（げんかん）のことが出て来る。阮氏一族は道を隔てて北側には富める者、南側には貧しい者が住んでいたが、陰曆7月7日に北側の阮氏の方は上等のきらびやかな衣装を外に出し、これ見よがしに麗々しく虫干ししたとあり、これに対して南側の貧しい阮咸は一種の褌（ふんどし）を竿に掛け中庭にぶら下げたと記されている。虫干しに託けて富を誇示しようという俗物根性への阮咸の痛烈な皮肉が込められた話として強く印象に残るものであり、反俗精神の真骨頂をここに見る思いがする。

ところで虫干しでも衣類ではなく書物の場合、同じ《世説新語》の排調篇という中にこれまた興味を引く次のような話が伝えられている。郝隆（かくりゅう）という人が虫干しの日に日向で仰向けに寝そべり、これを書物の虫干しと称したというのである。同書の表現だけではもう一つぴんと来ないものがあるので同じ話を取めた《蒙求》（唐の李瀚著）の注釈本（宋の徐子光注）に解説を求めると「我、腹中の書を曬すなり」とあり、腹と書物の関係を踏まえての話であることが分かる。多くの書を読み腹に詰め込んだ学問、それを書物の虫干しと洒落て見せるとは実に奇抜な発想である。

ここで虫干しから離れ、腹が学問に関係している中国の表現例をいくつか見てみようと思う。腹の中の本箱を意味し、そこから転じて博学を言うのに用いる「腹筒（ふくし）」という語がある。「五車腹筒」となれば車五台分の書物が腹の本箱に詰まっていることで大層広く学問に通じているとなる訳である。本箱が腹にあるというこの意識は先の郝隆の話を手本とせ誠に興味深い。次に宋の蘇軾の〈和董傳留別〉（董傳の留別に和す）という詩を見るに「腹有詩書氣自華」の句の中に「腹に詩書有りて」とあり、詩書の学問、つまり古典が腹にしまいこんであると表現している。腹と学問の関係はここからも明確に見て取れよう。《古今小説》（明の馮夢龍編）にある「腹中記誦五車書」も然り。学問が深いことを腹の中に夥しい数の書籍を覚え込んでいると記しているのである。もう一つだけ挙げておこう。学があることを言う表現の中に「肚子里有墨水」がある。ここで「肚子」は腹のこと、「墨水」は学問を指す。両者の密接な関係を示すものとして上記同様の捉え方ができる言い方になっている。

この様な例は外にいくらでもあり、漢民族にとって腹に学問を蔵するとの意識は広く一般的なものだと言って差し支えないようである。

たに みねお

〒737-8512 呉市若葉町5-1 海上保安大学校

## ■ 食する心

唐代の李紳の作で「憫農」（農を憫れむ）と題する詩があるが、その中に見える

誰知盤中飧  
粒粒皆辛苦

という句は食の本源を言い得た実に巧みな表現だと思う。「誰か知らん盤中の飧 粒粒皆辛苦なるを」とは「食器の中のご飯、その一粒一粒が農夫の辛い労苦の結晶であることを知る者としていないであろう」の意であるが、ここには食の原点が忘れられていることへの嘆きを通して本来のあるべき姿が説かれており味わい深いものを覚えるのである。

米を食する時は汗水垂らして働いた農民の苦勞を思うべきであり、その苦勞を噛み絞めて食べるようにするなら自然と感謝の心も起こるであろうし、この感謝の心があれば苦勞がひとり農民だけのものではなくなるという気持ちになり、自身にも苦勞を課し自分の為し得ることで世の中に報いんとするはずである、そしてこれぞ食べるという行為の社会的意味なのだ、と上の句は教えているような気がしてならない。そこには「飲水思源」（水を飲んで源を思う）と共通のものがあるだけではなく、「不勞働者不得食」（働かざる者は食うべからず）に通じるものまでをも含めた食の倫理性と社会性が言外の意として伝わってくるように感じるのである。

ところで、食べるという行為についていまひとつ触れておきたいことがある。それは静かな食べることへの集中の姿勢である。作家の檀一雄が食事中は全神経を食べることに集中させたというエピソードや戦前の日本の作法を重んじる家庭における食事風景は黙々と食べることに専念する静かなものであったというのがそれで、このような食への真摯な一点集中にこそ食することの意味を深く認識する豊かな心を見る思いがして美しいと感じるのである。この背景には私の推測だが《論語》の影響がかなりあるのではないだろうか。その中の〔郷党第十〕、これは孔子の平素の生活様式をさまざまな角度から記したもののだが、ここに「食不語」（食らうに語らず）とあって、これが食事の作法を根底のところまで律してきたと見られなくもないと思うのだが、どうであろうか。《論語》への親近感が薄れるにつれこの種の作法も廃れてしまったような感があり、心の痩せ細った人の貧しい食べ方がやたら目に付く昨今を憂う気持ちが私の中で益々強くなっている。食べ物が豊かであることと豊かに食することは全く異なるわけで、これを履き違えるようでは食の原点など頭の中を掠めもしないであろう。

## ■ 体を動かす

現存する毛沢東の最初の論文は一九一七年四月の《新青年》に掲載された【体育の研究】である。体育が精神と肉体に如何なる作用を及ぼすかを説き、身体の各部位を鍛える「動」の重要性を論じたもので、これは当時の中国としては実に画期的なことであった。と言うのも朱徳がスメドレーに語っているように旧中国では体操を含め身体を動かすことは下品なことだと考えられていたからである。毛沢東は青少年時代から新しい可能性を生み出す試みはどんどん実行したと言われている。あらゆる機会を利用しては体の鍛錬に励んだのもその一環としてであり、この【体育の研究】という論文も彼のそうした既成観念にとらわれない進取の気象がなした産物だと見てよいであろう。

ところで中国の古い社会を特徴づけていた体の動きを極力抑えることが尊いとする考えを読書と労働の二つの面から見ておこうと思う。先ず読書の面からであるが、このような社会は読書のみが高尚で他はすべて卑しむべきもの（「万般皆下品、唯有読書高」）という思想を醸成しやすく、それを正当化するということである。蔑まれる「動」とは対極にある「静」の中心に読書を据え、これに価値と優位性を与えるわけである。しかもことはこれだけに止まらず、読書が可能で知識を専有する層とそうでない層との分化が図られ、延いてはこの理まるべくもない溝を隔てて支配と被支配の関係が構築されてゆく。高尚な読書も万人が享受するのではなく、一握りの知識人が独占してこそ意義ありとする意図的なものが言外から伝わってくるのである。

次に、労働の面からであるが、このような社会は頭脳労働を極めて高く位置付け、肉体労働を露骨に

蔑視するということである。孔子に典型的に見られるこの種の傾向は搾取階級の思想そのものと言ってよいだろう。「頭のない人間は体を使え」式の傲岸不遜な遣り口が罷り通る世界である。肉体労働を軽んじるものだから働くだけ働かせておいて十分な対価を与えず、汗水垂らした人の労働の成果を収奪し勤勉さを踏み躪るということを何の呵責もなくやってしまう。「動」が正当に評価されないことの帰着点とすべきであろう。

新中国になり「社会主義の総路線」以後、「三大格差」の一つである頭脳労働と肉体労働の格差を解消することに多大の力が払われたり、文革中に知識青年を農山村に下放させ長期にわたる労働参加で思想改造をさせようとしたことなどは旧社会を覆っていた上記の意識が如何に大きかったかを物語るものであろうし、新中国になってもそれが根強く残っていて国家建設のネックとなっていたことを示していると言ってよいであろう。

## ■ 旧中国と医

中国は西洋医学とは全く異なる体系としての中国医学を編み出し発展させてきた国で、その長い伝統の中からは扁鵲、華佗、張仲景を始めとする名医や良医が数多く生まれているのだが、その一方で職業としての医者となると、旧中国にあって社会的評価が極めて低いという状態が長きにわたって続いたのである。医に従事することに人々の尊敬が集まるどころか、不信、軽蔑、甚だしくは憎悪の念で以て見られるというおぞましい日陰の存在としての職業であったことは大いに注目してよいであろう。

三国時代の魏の名医華佗は医者と呼ばれるのを恥じたと言われているし、敗血症で命を落とした漢の高祖劉邦は医者を軽蔑していたと伝えられている。また、明代の人で薬学書『本草綱目』を著した李時珍の家は代々医を生業としていたが、その父は世間の医者に対する蔑視を強く意識して息子には役人になってもらいたいと願った話が残っている。比較的近いところでは文豪魯迅が「父の病気」と題する一文の中で伝統的中国に皮肉混じりの痛罵を浴びせているが、これも同類と解してよかろうと思う。外にもこういった例は幾らでも見受けられるのである。

医者という職業が旧社会にあってこうも貶められていたのには種々の事情が働いていると思われる。そのうちで主たるものの一つは医が「仁術」ではなく「算術」に墮していて患者の懐具合に応じて匙加減をしたり、「医生坐轎，窮家不到」（医者は駕籠に乗っても貧乏人のところへは寄り付かない）という諺が示す如く医療行為が病人の貴賤の別に左右され、「医德」（医者としての品德）を著しく欠いた功利主義的な医者を多く生んだからではないかということである。「仁心仁術」（慈悲の心と仁の道を行う手立て）は良医を称えるのによく使う言葉だが、これとは対極にある邪の道が彌漫すれば人心は離れてゆくのが必定というものであろう。

もう一つ考えられる事情がある。これは特筆すべきことなのだが、「巫医」という存在である。「巫医」とは病を治すに神憑りで祈り詐欺的行為をする巫女のことで旧社会にあっては医者と同類に見られたという。「病入膏肓」（病膏肓に入る）の故事に例を求めると——晋の景公の病が重くなり、先ず「巫医」を呼んで治療させたが効き目なく、医師の派遣を秦に頼んで名医緩がやって来た。——とある。医師よりも先に「巫医」が呼び寄せられているのだが、この「巫医」が社会に深く根を下ろしていたことは他のさまざまなものからも窺えるのである。人を幻惑するかなり怪しげな「巫術」（妖術）を用い、それによって医の道が極めて歪められてしまったことは想像に難くなく、流した害毒は計り知れないと私は予てより推測している。因みに日本語の「藪医者」は本来「野巫医者」（「藪」は当て字）であって加持祈祷により医療を行う者を指したのだが、ここにも「巫医」が登場し迷信的な色彩が伝わってくるから興味を引かれる語である。

「医乃九流魁首」（医術はいろいろな学問の中でも第一級のものである）と格付けがなされることもあるぐらい医が重視されながら正道を歩む医が上述した如く邪の横行に阻まれて脇や片隅に追い遣られていたという感がどうしても拭い去れない。そしてこれが医者全体への憐れむべき低い職業評価になっているのではという思いを強くするのである。後年中国人は「東亜病夫」（東アジアの病人）と揶揄されるまでになるが、このことに先の事情が与っていたならば中国医学の真面目のためにも大変不幸なことだっ

たと言わざるを得ない。

## ■ 五穀を断つ

道教の修行法の一つに「辟穀」（「断穀」「絶穀」とも呼ぶ）というのがある。これは五穀を断つことである。五穀を食することにより「三尸」という虫が人体に生じ、これが悪い気を招き、身を害し災いをもたらすとされており、五穀を断つ修練を積むことで三尸が生じるのを防ぎ、不老不死が得られるとする考えが存在するのである。もっとも辟穀と併せ、呼吸法と手足の屈伸運動により気血を充足させる導引術も行う必要があるのだが、ともあれ古代中国人の中にこの修行法を取り入れた例はいろんな文献から知ることができる。漢の高祖劉邦の参謀として活躍した張良は生来病気がちだったため導引して穀を断つという長生術を実践していたことが《史記》に見えるが、これはそのほんの一例である。

ところで、日本の中世文学に「穀を断つ」とか「五穀を断つ」という表現を少なからず目にするが、これは紀元七世紀末に我が国に入ったと言われる道教が当時の社会にかなり浸透していたことを物語るものであろう。ただ、同じ穀断ちながらその目的とするところが日本の場合中国のそれとかなり違う点は注目すべきである。例えば、《竹取物語》（平安前期成立）にはかぐや姫から難題を吹っ掛けられた貴公子の一人として車持の皇子の話があるが、蓬萊山に行って取って来るよう求められた玉の枝を皇子の命で細工人達が密かにそれらしくつくるところで五穀を断ち、神仏に祈願して千日以上にもわたり努力して完成させたとある。つまり、中国にあっては穀断ちが不老不死を得る養生法として行われる色彩が強いのに対し、日本の場合のそれは立願成就という面が濃いということである。《今昔物語集》（平安末期成立）にあっては然り。そこには「穀を断つ」が計五回出てくる（巻四第二十七・二十八、巻十二第四十、巻十三第二・三）が、そのいずれの場合もある事を神仏に祈願する手段として穀断ちが行われているのであって中国のそれとは趣を異にしている。

宗教の方面で近世になると修験道関係の行者達が穀断ちして長い時間をかけ自分の肉体をミイラ化させて土中入定するという、いわゆる即身仏が出羽三山の湯殿山などで多く見られるようになるが、これとても民衆の済度を願う修験者が靈妙な験力を得るべく穀断ちしているのであって、それが人間の肉体を持ったまま成仏しているわけである。ここにも日本的なものを強く感じないわけにゆかない。

## 参考文献

論語

史記

蒙求

世説新語

古今小説

春秋左氏伝

魯迅：朝花夕拾

毛沢東：体育の研究

スメドレー：偉大なる道

鈴木修次：漢詩漢文名言辞典

竹取物語

今昔物語集